

平成3年度

## 社会学部公開講座概要報告

桂 良 太 郎

去る平成3年9月14日(土)2時から4時半まで奈良県文化会館2階の合同研修室にて平成3年度の奈良大学社会学部公開講座が開かれた。ちょうど折しも台風接近という雨風の降りしきる最悪の条件であった。当初は参加者が少なくなるのではないかと心配されていたが、予想に反し総勢127名もの参加を得ることができ会場は予備の椅子を出さなければならないほど人であふれ上がった。その内訳は、一般参加者は98名(男性18名、女性80名)、学生参加も22名を得た、(奈良大学生20名、奈良女子大学生2名)。奈良大学からは教員他5名およびパネリスト2名であった。

参加者の年齢構成をみると、60歳以上が14名(11%)、50歳台が18名(14.2%)、40歳台が21名(16.5%)、30歳台が36名(28.3%)、20歳台27名(21.3%)、不明が11名(8.7%)というように各世代からの参加者を得た。

今回のテーマは「新しいライフデザインを考える一女性がエキサイトする社会にむけて、家庭、地域、職場からの構想」というまさしく時代の変化を見越したテーマであったと思われる。今回は2名の外部からパネリストを招いて行われた。ひとり、奈良文化女子短大講師であり関西女性学研究会代表の楨村久子氏と、もうひとり、花王生活科学研究所消費者交流室長である酒井澄子氏であった。

講座はこれらの外部のパネリストの他に桂が加わり、3名のパネリストと、全体のコーディネーターとして、社会学部助教授の松戸武彦、フロアー司会者として社会学部助教授君塚大学の計5名のメンバーで進められた。

土田英雄奈良大学総合研究所長のあいさつののち、さっそく各パネリストからテーマに即した問題提起がなされた。まず桂からは、家庭生活からみた21世紀のライフデザインについて初題し、その後、楨村久子氏からは地域社会からみた新しいライフデザインの現状と課題について初題がなされ、最後に酒井澄子氏より、職場集団における現在の女性を中心とした動きについて、経験豊かなキャリアからみた問題点が提起された。

その後、フロアーからの質疑応答がなされ、さまざまな質問や意見が出され、まさしくフォーラム形式の公開講座にふさわしいフォーラムを開催することができた。

さまざまな意見や感想のなかで、その主なものを整理すると次のようになる。そもそもライフデザインという用語の概念に関する質問や、ライフスタイルとはいったい何であるのかという用語そのものの使い方などについての質問がなされた。

次に地域社会の環境問題（ゴミ等の問題）をライフデザインとの関係のなかでどのように考え、それぞれの地域社会でもってどのように実践していくかといった具体的な問題解決に関する意見も出された。

家庭で介護が必要になっても、現状では男性が福祉の領域に参画する事が少ないのではないかと、もっと男性が介護を含め、さまざまなボランティア活動に参加していけるようなプログラムを行政は考える必要があるのではないかと提言も出された。

今の若い青年層、とくに学生たちがどのような生活意識をもっているのかについても多くの質問が投げかけられた。とくに最近の学生たちがゴミを道端に捨てていくことをなんとも感じていないというきびしい指摘も出された。

それに対して、参加した学生のなかからは、たとえ数のうえからは少ないとはいえ、一部の学生のなかには、熱心にボランティア活動に参加している者がいると答える一幕もあった。

職場を含め、企業事態も地域社会の一員としての役割を担わなければならない時代がやってきた。企業市民（フィランスロピー）としての生き方や、職場内での女性たちの発言が多く取入れられ、かつての男性原理からはやく脱却し、企業や職場が大きく今後変化していくのではないかという意見が出された。

今回の公開講座は、一般市民を対象としたフォーラム形式の講座であったために参加者の層が多様であり、しかも職種も多彩であったことが特色であったといえる。そのような意味からすれば、さまざまな層の市民に社会学部の存在を少しでも知ってもらえる機会となったのではないかとと思われる。

ただし、テーマの範囲があまり広すぎたため、若干論点の焦点がぼやけた感があったことは今後の課題となる。

この公開講座を企画、立案そして運営を学生たちと共になし得たことはもう一つの大きな成果でもあった。

最後に関係各位にここから謝辞を申し添えたい。